

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	福田 聖
論文題目	低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革
<p>本論文は、古代国家形成の中核地帯から離れた周辺部の関東地方が、新たな古墳時代の文化・社会に向けてどのように移行したか、その要因は何か、それをどのように考古学的に知覚するか、について論じている。従来、当該領域は、大型前方後円墳の発生など本場の奈良盆地など近畿地方を中核に進展してきたが、申請者の福田氏は初期国家形成への動向を、周辺部である関東地方の文化・社会の変革から見出そうとする。それは大規模な前方後円墳などの大型モニュメントの出現ではなく、生活の根幹を占める居住施設と墓制、土器などの生活物資面の変革から解き明かそうとする周辺部からの眼差しであり研究姿勢である。</p> <p>本論は7章構成で、第1章で研究の目的と方法論を提示し、第2章から第5章で関東地方の低地部に発達した方形周溝遺構の検討を行う。従来、遺構の上で混淆されてきた方形周溝墓と方形周溝持建物を明確に区別しながら、荒川低地、東京低地、妻沼低地、加須低地などで発掘調査された25遺跡324例を具体的に分析した。第6章以降で、方形周溝墓と方形周溝持建物の性格の違いを弁別する方法として、周溝における構築後の埋没過程に注目し、土壌堆積上の差異を認め、埋没サイクルの単位に違いがあることを明確にして両者を区分する基準を得た。しかし、それでも内部施設を有する方形周溝持建物と、区画内に施設がない周溝持遺構との関係性については不明確な部分を残すが、福田氏は両者の関係を不問に付すことなく、平面形、規模、開口部、周溝の規模、周溝内部覆土層の客観的基準を設定して比較吟味し、方形周溝持遺構が方形周溝墓ではなく、建物跡であることを確定した。結局、方形周溝持建物は、周溝持掘立建物、周溝持堅穴建物、周溝持伏屋式平地建物、周溝持壁立式平地建物の4種類に類別されることになった。この部分は、福田氏が最も証明に力を注いだ箇所であり、いわば考古学的資料を悉皆的に分析把握した結果である。本論文の骨格を形成したのは、まさに基礎的資料の徹底的な集成と、同一基準に基づく遺構分類と建物種類の解明であった。</p> <p>考古学的な資料分析を基礎として、第7章で古墳時代開始期における関東地方の変革を検討し、低地部に検出される建物の系統が関東地方独自の発展から導き出されたのではなく、東海地方など外来系文化要素の導入によって達成されたことを証明した。方形周溝持建物の起源系統について、北関東において北陸系要素を認めつつも、南関東地域は、東海地方東部の系統によって解き明かすべきことを明確にした点は本論文の大きな成果である。</p> <p>関東地方在来系の文化・社会と新たな外来系の文化・社会は、互いに無関係に独立したまま、いわば没交渉の状態では併存したのではなく、むしろ互いに融合的な関係を構築したと福田氏は考える。両者が同じ遺跡内で共存し、何らかの形で混成、融合する事例が多いことを各遺跡の分析から導き出した。方形周溝持建物を持つ集落遺跡と在来系の堅穴建物で構成される集落遺跡の類別、それらの立地上の差異(台地上か低地部か)、集落到搬入された外来系土器の在り方、水晶・碧玉・ガラス製の玉製作の在り方の違いなどを加味して、在来・外来要素の組み合わせの違いにみる在来・移民集団の構成原理と集団間の関係性を具体的に明らかにした。</p> <p>また関東地方にもたらされた「S字状口縁台付甕」が、東海地方そのままではなく、関東地方の在来系技術によって模倣されたことを証明することにより、文化の波及が東海系住民の直接的な移住によって担われたことを認めつつも、その移民勢力を比較的小さなものと評価した。在来系住民の力を大きく評価したのは、遺跡出土の土器の大部分が関東在来の土器型式によって占められているという事実に基づく。この判断は妥当であろう。</p> <p>このように関東地方における東海系移民勢力と関東地方在来住民との混成によって、新しい文化社会が開始されたことを、低地遺跡、台地上遺跡などの立地形態と、方形周溝持建物の類別、出土遺物などの組み合わせから類推する。両集団間の関係は、婚姻や擬制的親族関係の紐帯などを構築したと推定し、新たな社会関係はそこから出発したと考える。この推定は考古学的証拠によって必ずしも証明されたわけではない。その推定を可能ならしめる民族誌などの明確な事例研究がほしかった。それについては今後の研究の進展の中で位置づけるべきであろう。</p>	

本論文は、従来、埋葬遺構と考えられた方形周溝墓のカテゴリーの中から、方形周溝持建物を抜きだし居住施設として位置付ける点で、従来の学説に大幅な修正を迫るものである。それらが真に居住施設か否かの妥当性は、他の選択肢が完全に消えたわけではなく、今後の検討に委ねられるが、本論文が当該分野の研究で最先端の議論を提出したことは疑いない。また、古墳時代初期の社会形成に向けた胎動が、関東独自の動きから発生したのではなく、西方の東海地方からの移民によってもたらされたことを証明したことは、古代の初期国家形成に向けた前史として重要で、歴史の周辺地域がその動きに巻き込まれた過程について明らかにするものである。この問題については、すでに土器型式の研究から比田井克仁氏が論究した点であるが、申請者はそれを方形周溝持建物の上から明らかにしたところに独自性が認められる。

東海地方に起源する渡来移民集団が関東地方の低地部に浸透するように登場し、台地上に生存の舞台を形成した在来住民との間に、婚姻や擬制的親族関係の紐帯を通じて新たなコミュニティを形成する過程を、遺跡における諸要素の組み合わせの事実関係に基づき、建物建設と土器製作にかかわる男女の分業論と絡ませて議論した点は、本論文における大きな特徴である。なかばモデルとして描かれた「関東型一般集落」論には、階層化の未発達な理由など十分に検証されていない仮説を含むが、今後の研究に新たな指針を与えたことは明確である。

低地部への進出が新田開発と関連して、首長による統制と調整が必要とされる原因となったことを説くものの、従来の弥生的首長とは異なり、なぜ新たな古墳時代の首長の登場を促す要因となったかについて、もっと明確な証拠を整備して説明すべきだと思われる。また、関東地方の首長による統治支配の方法が他地域と異なる点を述べるが、そのシステムが成立することを、ほかの要因と絡ませて有機的に示す必要があるだろう。しかし、それらの課題は福田氏に限らず、学界の普遍的課題であるとともに、本論文とは直接的な関連を持たない。今後の研究の拡充において深化すべき課題であると思われる。

以上、本論文は今後の研究において立証すべき点を含むものの、従来の考古学的事実認識に大きな改訂をもたらす、周辺地域における初期国家への移行過程に関して外来系要素の抽出を不可欠な手続きとするなど、関東地方のみならず周辺地域に視点を大きく拡大した点が高く評価され、学位審査委員会では博士学位論文に値すると判断された。

公開審査会開催日	2013年 3月 28日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		高橋 龍三郎
審査委員	早稲田大学文学学術院・前教授		岡内 三眞
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		長崎 潤一